

少年音楽家 (六)

東京女高師教授 岡田美津

六、やくざの仕事

その日、晝飯後、民雄は御内儀さんが食卓を片付けて皿小鉢を洗ひ出するのを暫く黙つて眺めて居た。とう／＼。

「僕・手傳ひませうか」と民雄は悄然と訊ねた。

御内儀さんは、民雄の日に焦げた、ちいさな手を覺束なさうに瞥見て頭を振つた。

「いえ・不用・折角だけれど」と彼女は返事を取繕つた。

又五分程、民雄は無言でゐたが、こんどはもつと物思はしさうに訊ねた。

「あの一日かうやつて貴女のしてゐる事は役に立つ仕事なのですか」

御内儀さんはやゝ暫く吃驚した態で、小桶から出した濡手を、中ぶらりんに差上げて。

「え？それやそうとも！何て、下らない事を訊くのさ。どうしてそんな事を思ひついたの、え？」

「新右衛門さんがそいつたのです。でもね、父さんが仰る「役に立つ仕事」つていふのと随分違ふんですもの」

「ちがふっ」

「え、御皿を洗つたり、御飯の支度をしたり、後片付をしたりするのは、爲なくてはならないやくざの仕事なのだつて父さんが仰つてね……あなたの方半分も父さんはしませんでしたよ」

「やくざ仕事だつて、まあ！」

と言つて御内儀さんは、忌々しさうに皿洗を續けて

「御前の御父さんらしい言ひ草だね」

「さうなんです。父さんは始終さういふ風だつたんです」と民雄は愉快氣に頷いて一寸してからまた訊ねた。

「あの、今日はちつとも散歩に出掛けないんですか」「散歩に？何處？」

「あの森だの野だのを抜けて……何處かへ」

「森の中を歩く、今？…たゞ歩きに。それどころか御前、私や他にする事があるんだよ」

「そう、惜しいンですな」と民雄の顔はさも氣の毒だといふ表情になつて。

「こんな好き御天氣だのに？明日は雨が降るかも知れませんよ」

「さうかも知れないよ」と御内儀さんは、ちよこ眉を揚げて意味あり氣に民雄を瞥見して言ひ返した。

「降ろうと降るまいと私が散歩に出るには一向かかはりはないから」

「さうですか」と民雄はすごくした「そんなら僕嬉しいな！僕も雨は平氣ですよ。父さんと僕とでいくども〜雨の中を歩きましたつ。たゞその時はバイオリンを持つて出られないから、やつぱりよい御天氣の時の方が好きでしたけれど。でも、又雨降りの日にはあたりまへの日に無いものがありますね。木の葉の上で雨の雫が踊つたり、雨が風に追はれてさつと走つたりして。廣い原みたやうなところで、横にしぶく雨に觸るのはいゝ氣持ですな」

御内儀さんは眼をまろくした。それから、身慄をしてどうしていゝか分らないといふ風情で兩手をさし舉げた。

「まあ、此の子は」と力なく叫んで、臺所の用事に戻つた。

皿洗が濟むと掃除なので、御内儀さんは、めつたに日光にも空氣にも觸らない陰氣くさい客間の塵拂ひにと急いだ。無言で見守つてゐた民雄は、後から跟いていつた。客間に置き並べてある物品——椅子長椅子、上面が大理石のテーブル、窓掛、クシヨン、上被ひ、椅子蓋ひガラスの被さつてゐる蠟細工の花、壓し花、花束、隅の柵にごつちやに置いてある石塊貝殻、大小さまざまの花瓶など——の多いので彼は眼を見張つた。

御内儀さんは、入口で民雄が入りかねて居るのを見て。

「あゝ入つてもいゝよと呼びかけて「たゞね物を觸つてはいけない。私が今塵を拂ふのだから」

「僕まだこの室を見た事がなかつた」と民雄は考へた。「さうだよ」と、御内儀さんは少し自慢の氣味で「此處は平常は使はないの、あすこの寢室も。こ

こは御客様の時ので牧師さんだのそれから御葬ひの時に：」と言ひ差した御内儀さんは急いで民雄を見た。少年は何も聞いてゐないらしかつた。

「この家には、あなたと、新右衛門さんと、平藏さんとそれだけで、あとだれも居ないんですか」と民雄はまだ不思議さうに四邊を看廻しながら訊ねた。

「あ——いまは」と御内儀さんは咽ぶやうな息づかひをして壁に掛けてある少年の肖像畫を瞥見した。

「でも随分澤山室がある——品物もね。父さんと僕のある家は二室あつて物ツて何もない位。僕の家は此家とそれや違つてゐました」。

「それやそうだろうさ」と言つて、御内儀さんは急ぎながらも大切さうに塵を拂ひ出した。彼女の聲には自慢の氣味が依然として入つて居た。

「さうですね。でもこの室はあんまり使はないのなから助かりますね」

「助かる。こ呆れて御内儀さんは、仕事の手を止めて目を見張つた。

「え、他に室が澤山あるから、そつちに居ればいゝから。こゝに居るには及ばないでせう」

「こゝに居るには及ばない」と御内儀さんは叫ん

だ、ひた呆れに呆れる他には術もなくして。

「え、だけれど、こんなものをとつて置いて、毎日綺麗に埃の溜らないやなにしなければいけないですか。誰かにやるか捨て、しまふわけにいかないですか」

「捨て、しまふ！」彼女は兩腕を夢中で擴げて、危険の逼つた一つ／＼の大事な寶物を抱へこむでしまふ氣色だつた。

「御前は氣が狂つてゐるのぢやないか。こゝにあるものは貴重なものだよ。御金がかゝつてる——時もある——勞力も、美しいものを見ても分らないのかへ」
「え、僕美しいものは好き」と民雄は無禮とも心付かずに、美しいといふ言語に力を込めてにこ／＼して答へた。

「山にゐた時には美しいものを始終持つてゐたのです。日出に、日の入りに月に星、銀の湖に、それから帆かけてゆく雲の御船に……」

併し御内儀さんは癢に障るといふ風をして、民雄を遮つて。

「もういゝよ。育ちが育ちだもの、ありさうな事だ、御前にはこんな物は分りはしないさ。捨て、

しまへとさ、ま、ほんとうに！」

といひ／＼彼女はまた塵拂に掛つた。こんどは母親がむづがつてゐる子供を撫で慈しむやうな手觸りで品物に對つてゐた。

民雄は何だか落付かない居悪い感じがして、心配な眼付で御内儀さんを視てゐた。それから詫びるやうにかういつた。

「僕たゞかう思つたのですよ。もしあなたがねこゝにあるいろんなものを掃除しないですめば、もつと散歩にゆけるだらうと思つたの：今日だつてまた他の時だつて。暇がないんだつて仰つたでせう」

でも御内儀さんは唯頭を振つて歎息をして。
「もういゝよ／＼。御前が悪氣わるきで言つたのではないんだから。御前には分らないのがあたりまへさ」
民雄は御内儀さんが大事さうに品物をいぢくるのを熟と見入つて居たが、向きを變へて横手の縁へふら／＼と出ていつた。やがて階段に腰を掛けて、衣囊から二つの折りたゝんだ小さな紙片を取り出した。そして涙で眼を曇らせながら、今一度父さんの手紙を讀んだ。

「僕が悲しがるに父さんも悲しくなるから、悲しが

つてはいけないと父さんが仰つた」と暫くしてから彼は遠い／＼山へ眼を放つて獨語した。「そして僕が弾きさへすれば、御山が僕のところへ來てくれるから、僕はほんとに山の家に居る事になるんだつて。バイオリンの中に僕の欲しいと思ふもの——大變欲——しいと思ふものがみんな入つて居るんだつて」

泣きたいのをこらへて、民雄は衣囊に手紙を戻して、バイオリンに手を伸した。しばらくしてから、客間の椅子を掃除してゐた御内儀さんは、それを止めて戸口へ拔足で寄つて行つて息をこらして聽き入つた。稍、あつて彼女が立戻つた時にその眼は濡れて居た。

「あの子が弾くと、どうして私はうちの新助の事を考へ出すのだらう」

と布巾ふきんを取り上げながら吐息をついた。

夕食後、新右衛門夫婦は一日の骨休めに臺所の縁に出て居た。新右衛門は眼を塞いでゐた。彼の妻は納屋のぼんやりした輪廓だの街路みちだの前を通る一臺の荷馬車などを見据ゑてゐた。民雄は階段のところところに坐つて、月が樹の項を放れてだん／＼高く昇つて行くのを眺めて居た。やがて家へ、そつと入つてい

つてパイオリンを持つて出て來た。

美妙な音が一聲長くきこえて來た時、新右衛門は目を見開いて、口元を固くめて居住居を直した。すると御内儀さんは恐く夫の腕に手を掛けて。

「何も言はずに置いて下さい」と小聲に頼んだ「ま、今夜だけは弾かせてやつて、——淋しいんだよ——可愛想に」

新右衛門は、澁面をして肩をすぼめ椅子に倚れてしまつた。

それからあとになつて、御内儀さん自身が、「さ、民雄もう子供は寝るシですよ。二階の室まで一所に行つて上げるよ」

と言つて民雄を止めさせた。そして先へ立つて家へ入つて、蠟燭を點けてやつた。

民雄は臺所の上に當る二階の小室で獨りになつた。昨夜と同じにちいさな黄ばんだ白地の寝衣が椅子の背に掛けて置いてあつた、御内儀さんは、やつぱりその寝衣を弄りながら涙を拭いたのであつた。昨夜と同じに、大きな四ツ柱のある寢臺が、隅っこに、いかめしく幅をとつて居た。併し、今夜は掛蒲團も敷布もまくつてさ御入りと云はぬばかりにして

あつた。御内儀さんは、民雄が前夜床の上に寝たのを知つて、大變氣を揉んだわけなのである。

民雄は壁に掛けてあるピン刺の甲蟲や蟻に態と背を向けて寝衣に著換へた。それから燈火を消す前に窓の許へいつて、膝をついて樹越しの月を眺めた。

民雄は心にひどく迷が出て來たのである。一體自分はどうなるのだろうか考へ初めた。自分のする美しい仕事か世の中にあるのだと父さんは仰つたが、その仕事といふのは何だろう。如何して探し出すのだろうか。もし探し出せたら、それを如何いふ風にするのだろうか。また一つには自分は何處で暮したらよいか。今の家に居られるのか知らん。此處は自分の家庭では、勿論ないが、臺所の上には自分が寝てもいゝ小室があるし、親切な御内儀さんが居て時々悲しさうなあこがれるやうな眼で——時には此方まで悲しくなるやうな眼で、自分を見て微笑してくれる。自分は今では御内儀さんから離れたくない：父さんもいらつしやらないのだから。

それに金貨の事もあつた。民雄は、それにも亦當惑して居た。それをどう始末をしやう？自分には入用はない。親切な御内儀さんが食べるものを澤山呉

れるから、自分が店へ買ひに行くには及ばないし、一寸考へたところでは、何に使ふといふ目的もない。重くて身に著けて居るのは窮屈でしやうがない。そうかといつて、捨てるのも厭だし、持つて居るのを他に知られたくもない。一度、一枚出したら盗人だと言はれたのだから、かう澤山持つて居るのを他が知つたら何といふだろう。

民雄は父が隠して置け入用があるまで隠して置けといつたのを今急に思ひ出した。やつと彼は安心した。どうして、今まで思ひ出さなかつたらう。隠すには好い場所がある——この室の爐の後部にある、ちいさな戸棚がいゝ。民雄は嬉しさうな歎息を一つして立ち上り、衣囊から金貨を取り集め、戸棚の書物の後へ人の目に付かぬところへ押込めた。時計もそこへ隠した。たゞ、亡くなつた母様の小肖像だけは、そつと衣囊に戻した。

農家で民雄が暮した第二回目の朝は、第一回目のとまづ同じやうであつたが、新右衛門が薪箱を一杯にしると言つた時に、こんどこそは誘ひ顔の甲蟲をも蝶をも全く見ぬ振りをして、彼は、目前の仕事が終るまでせつせとした。

丁度晝食のすぐ前の事で、民雄が臺所にゐると、

平藏が困りぬいた顔をしてやつて來た。

「御かみさん一寸、横手の戸口まで出て來てくんなさらないか。女と子供とで何かはア困つてゐるらしいんだが。話がさつぱり通じねいで。何を言つてるんだかおらにやトント分らない。御前さんなら分るかしれねい」

「如何だかね」と言ひ掛けたが、御内儀さんはすぐその方を差して出て行つた。

玄關口のごとくに、可愛らしい物怖ぢしたやうな若い女が十歳ばかりの男の子を連れて立つて居た。御内儀さんの姿を見ると、身振り手真似を混せてのべつに何か分らぬ事を話し立てた。

御内儀さんは逡巡して丁度納屋から庭を此方へやつて來た新右衛門に、助けを乞ふやうな眼を向けた。

「御前さん、この人は何の用があるんだか分らないかへ」

新な人が加はつたので、見知らぬ女は、も一層喋々と述べ立てた。新右衛門は身振りをしながら話す女を睨むやうに暫時見据えてゐたが。

「分らねへ。フランス語らしい。何か：欲しいんだな」「そうとも——何だか知らねいが馬鹿に欲しいらしいんだ」と平藏はくどくと言つてゐた。

「空腹いのですか」と怖るく御内儀が尋ねた。

「ちつと位、言語が通じねいのか」と新右衛門が問

ふた。言語の通じない異郷へ来た頼りない身を察してくれとばかりに、哀れな眼差しで、女は甲から乙を見渡したが、絶望したやうに頭を振つて彼方へ向いたかと思ふと、急に嬉しさうな聲を擧げ、生き生きとした顔をしてくるりと向き直つた。

新右衛門と平藏は、見ると民雄が玄關口へ出て来て女に話しかけてゐるのであつた。民雄の言語も、女の言語同様意味がとれなかつた。

二人の男はぢつと見てゐた。新右衛門は、

「貴様そんなら此女の言ふのが分るのか」と鋭く民雄を遮つた。

「え、分るんです。あなた分らなかつたんですか。

此人は路をまちがへてそれで：

併し、女は進み出て民雄の耳に滔々と一伍一什を話しこむのであつた。話が終つて、民雄は人々の顔を見ると、一同はまだあつけにとられてゐる風であつた。

「何の用だつて言ふのだ」とピリツとする調子で新右衛門が尋ねた。

「ラベルツていふ人の家を探してゐるんです。この方の旦那さんの兄弟なんです。この方は、今朝汽車で此處へ来たんです、旦那さんが何處かへ一寸寄つてゐるうちに、汽車に取り残されたので、旦那さんは言語が出来るんですけれども、此方は出来ません。この國へ来てからまだ一週間にし

かならないんで、佛蘭西から来たつて言ひます」

「いや、どうだい、え？」と平藏は感じ入つて。

「まるで字讀むやうにこの女のいふ事が分るんだな。隣村に佛蘭西人が居らあ。たしか二人居かつけ。その一人の事を言ふんぢやないか」

「大方さうだろう」と新右衛門は同意しながらも、民雄の顔を不機嫌らしく見詰めて居た。新右衛門は女の事よりも、民雄の事を考へてゐるのが誰の目にもよく分つた。

「旦那あいな」と平藏は少し興奮して、「それあの用事で、おら一日二日の中に隣村に行く事になつて居たんだから、どうだろう今日晝すぎに出向いてこの女と子供を送つていつてやつたら」

平藏は、女の方を向いて、腕を振つたり田舎訛りをゴタ混ぜにして、御前の行きたいといつたところへ、おれが連れていつてやるのだといふ事を解らせやうとした。女は、やつぱり解らないやうな顔をしてゐるので、民雄が早速仲へ入つて口早に二言三言いふと、女の顔には理解し得た悦びが顯はれて来た。

「御腹が空いてゐるのではないかツて尋ねて御らん」と、こんどは御内儀さんが言つてみた。

民雄は返事をきいてすこくしながら。

「いゝえ空いてゐませんで。子供は空いてゐるツていふんです」と通譯した。

「そんなら臺所へ来るやうにいつて御くれ」と御内儀さんは指圖しながら家の内へ入つていつた。

「ささまは佛蘭西人だな」と新右衛門は民雄にきいた。

「佛蘭西人？いえ、いえ」と民雄は得意氣に「僕はこの國の人なんです。父さんがそ言ひました。この國で生れたんだつて」

「どうして佛蘭西語がそんなに話せるんだ」

「だつて習つたんですもの」と言つても新右衛門に得心が行かぬのを悟つて。

「獨逸語や何かと同じやうに、本でもつて父さんに習んだんです。あなただつてちいさい時に佛蘭西語を習つたんでせう」

「フム」と新右衛門は言つたきり返事はせず、のさ／＼歩き去つた。

食事が済むとぢきに、平藏は女と子供を馬車へ乗せて出て行つた。女は微笑を顔中に漂はせてそして、最後のなつかしさうな一瞥は、階段のどこに立つて手を振つてゐる民雄に與へていつた。

その午後、民雄は、バイオリンを持つて運動がてら家の背後の山の方へいつた。御内儀さんを誘つたところが、彼女は掃除も何もしてゐないのに斷つた。白い布に孔を明けて糸と針でできたそこを縫ひ合せてゐる以外に、大切さうな用事もして居なかつたのに。

民雄はそれから新右衛門を誘つた。ところがその斷りかたは、御内儀さんのよりも一層慳貪であつた。

「何だつて今役にも立たない運動におれがゆくものか——今にや限らねい——何時だつてよ」と彼は言つた。

民雄は思はずしりごみした。顔は微笑してゐたが。

「役に立たなくはありません。何でも私達をよい調子にしてくれるもなら無駄ではないつて、父さんが仰つたんです」

「よい調子にだぞ？」

「調子が變な時に父さんがなさるやうな顔を、あなたがしていらしつたら、僕を言つたんです。氣分をよくするのは、運動に行くに越した事はないと父さんはいつも仰いましたよ。僕は——僕は今日少し調子が變なんです。あなたの顔付であなれもそうかと僕思つたので、散歩にあなを誘つたのです」

「フム——いやもう——もう言ふな。生意氣云ふな。いゝか」

と如何にも怒つた氣に彼はあらぬ方を向いてしまつた。

民雄は解せないながら、重く沈んだ心になつて、唯獨り散歩に出かけた